

繪本三國妖婦傳

上編

二

13
2892
2



門へ 13
 2892
 2

繪本三國妖婦傳卷之二

呂子牙奇術 樵夫の難救 並 西伯熊と夢

子牙渭水に釣と妻の馬氏管艸監致現ふ圖

武吉岐別城の門吏と口論の圖

岐別の穿去に圓滾畫に本と刺て穿吏と

子牙奇術致以て重宝召たり公怒り

昭和九年
 七月三日

飛熊殿に入る圖

西伯子牙の庵を訪 並子牙が太公望と改め軍師

拜と同圖

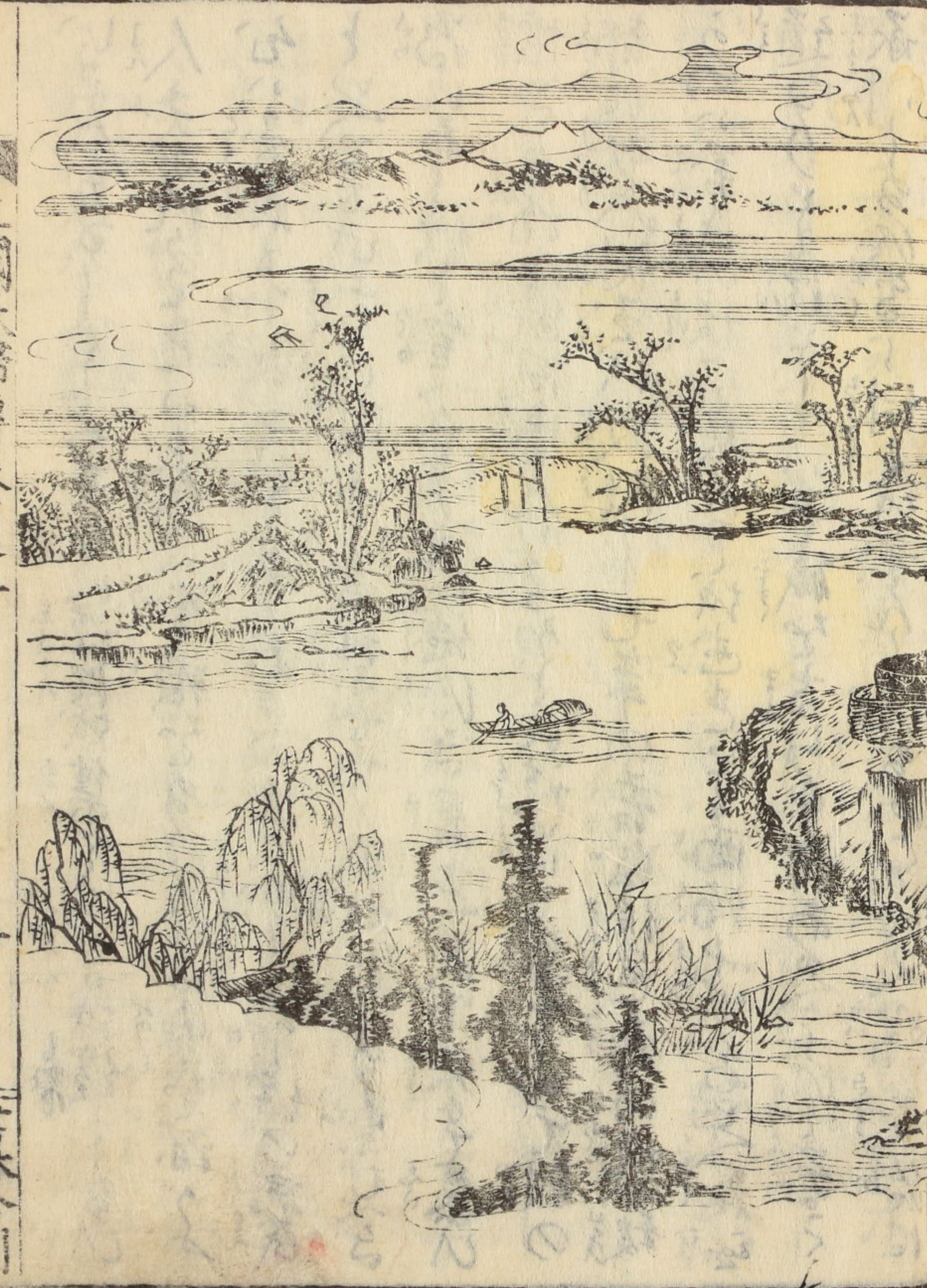
西伯子牙が同車して歸る圖

繪本三國志

繪本三國志婦傳卷之四

呂子牙奇術樵夫の狐を救 西伯熊を愛する

去河に西伯侯の虎の口を道を通る心地して陽陶の山に
に惠城に刑罰を勅され民の泣く苦に勅る偶
罪を犯すものあきば七に畫て牢と一木偶人を罰獄吏
と一のみ皆徳に伏して道を通るのかり 或は災祥を
記んをめ小城外に宮に臺を築一先より夫役の百姓
ども父母のたれに働くごとく日わびて成乾せしむるを
契と名付らるるを下の園を引いた麩麻の丁を放ち
沼を敷きて魚牧の形を常一も遊覧に彼のみを信



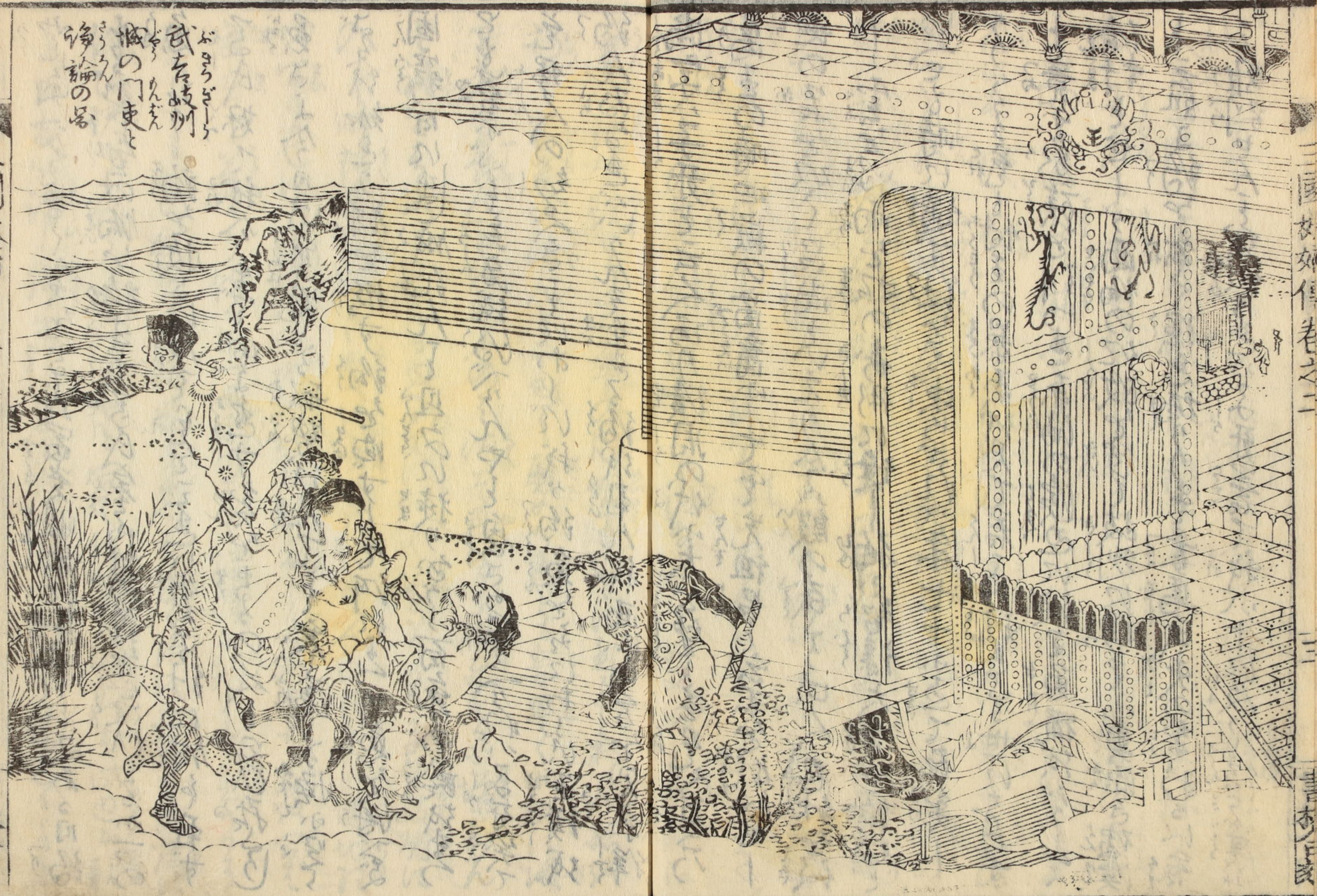
三國好婦傳卷之二
 管子牙明水
 釣中妻のる民
 貧籃成脱小
 呂

いこん方かーをめてこに流成集て海宴成禮一多ひ
人夫亦流くるまきる民の令銀をありうる案を録ぐ
公ハ五君も下民を啓るとありうす下績の流成
とどともいふに遊ぶ一或林不すう成我もとり案むへ
為にあつてと宣へうるに徳源さ君ゆへ天下を養て慕ひ
懐こ自物と威風盛んなるやどに流成も皆あつて殷の
都にお入討五成攻殺一七年の昔祖伯邑考の仇小殺
このふ義民の慈を救んと成述もとも西伯此てもあつて
道なりとも信とてハ其職をあらむんハあつてはるる
承りしあつて討五成守んハはあつては又姓ハ姜はは

尚字ハ子牙と云く何り後周の代ハ大公望と云見之夏乃
禹王の時四嶽の苗裔ハしてそ先祖呂と云本を成知せ
地の名を以て呂尚といえり今ハ殷の民ハけ人恩祿を及
一雲を以て雨を招の奇術に達一狗ハ智謀大女を輸むと
いども時に遇ずはとも求められハ年七十ハ過て教養一
うりうりも是も討五の暴悪成見て君子ハ礼成る世にちりす
と竟ハ教族と一し東海の濱に徙る魚獵成なりと
活計とせ一ハ西伯の仁政を以て岐州に移り山奥源に破漢
と云れし釣を以て漁を極るを妻馬氏夫の愛むるに若
く難ハせんハ成るるは子牙言て我八十に及びハ位流成小

ぶらうざう
武吉岐州
城の門吏と
論議の巻

三國志演義卷之二十一



三國志演義卷之二十一

三

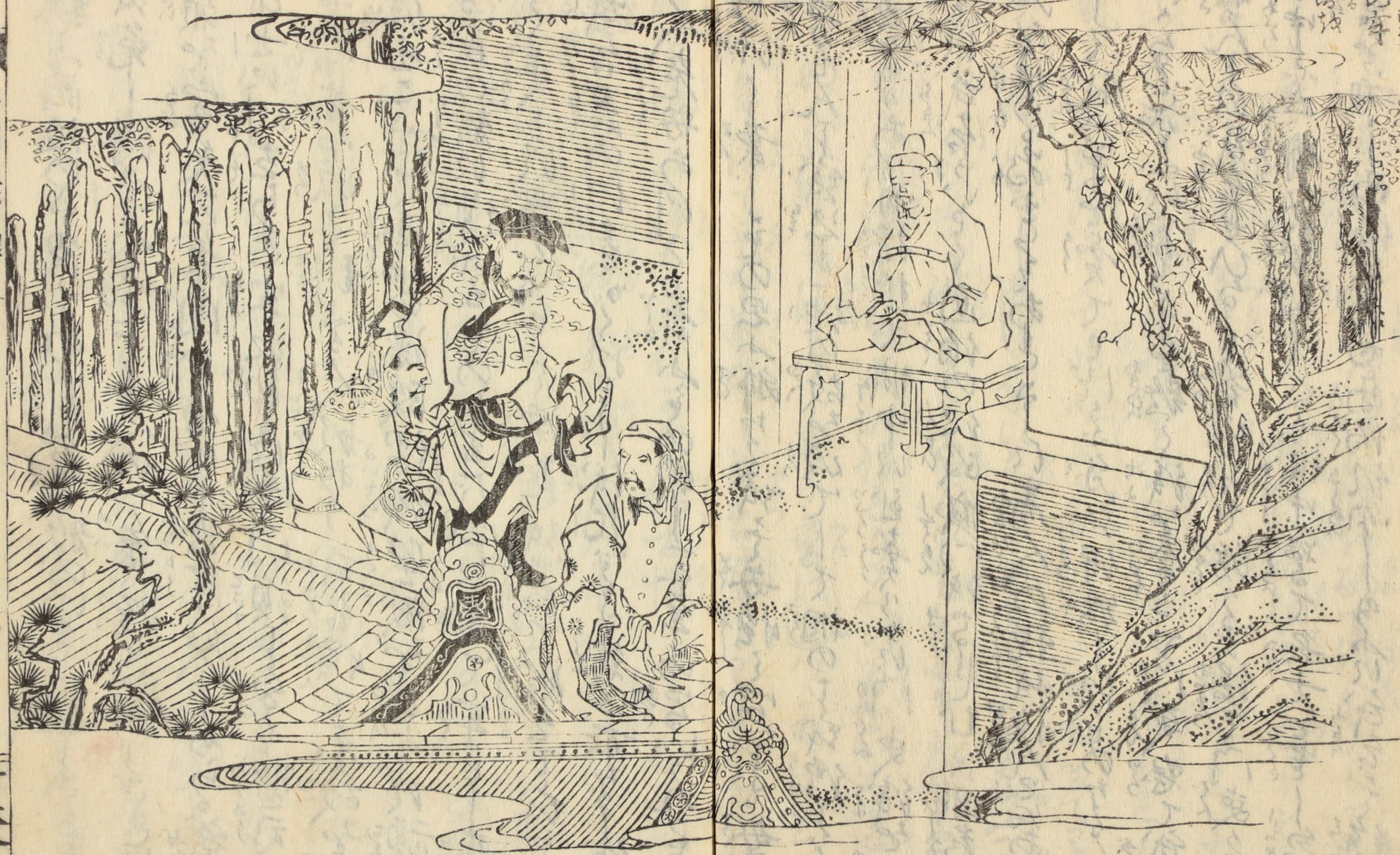
也一今嘗く愛をさるるが眼前に在り又ある日釣
 ちの如く魚の胸を捕りては氏家不の監禁を脱しつるの
 魚は釣を收るに及て是をさるる計に胸を用ず
 る氏怒り我今まが何は適す契をもちの人と思ひ我は
 憂さよ今日計を果し形勢はんてそ契を脱する様小空
 づら我知しり胸を脱す釣を由すし何はよて魚を得る
 困窮日には俄死んと旦夕に狭りかう百年の齡はま
 とも愛かぶるをさるるべらんやと息をさしてはるる牙笑て
 是婦人の知るにわくは我が釣魚をさるるにわくは王侯城
 釣におちこばいんをさるる釣魚用ん我西小の方をさるる小
 雲の瑞を脱しつる二年の月明王にむるすわん捨城
 打ちる者我城はんとさめぐ懸めらるる妾早く旧郷に返
 り先を去んと城思ふの何ぞ我がうけ死する小増らん
 と神をさるる去るるに何はむるる子牙は別に
 へ一時際を極むるを城はんはるる人の想夫に遇地
 城はんにけ橋溪の地城はんに教へるる小ぞそは城はん
 武をさるる去るるに一日例のく橋溪小釣して在るる
 ちの自を身保するもそまづ釣は止るるの産に
 伴ひ何ふよの耳らるるやと官で我軍はんれをけは小
 一友を許すはるる子牙をさるるをさるるやと母をさるる

雲の瑞を脱しつる二年の月明王にむるすわん捨城
 打ちる者我城はんとさめぐ懸めらるる妾早く旧郷に返
 り先を去んと城思ふの何ぞ我がうけ死する小増らん
 と神をさるる去るるに何はむるる子牙は別に
 へ一時際を極むるを城はんはるる人の想夫に遇地
 城はんにけ橋溪の地城はんに教へるる小ぞそは城はん
 武をさるる去るるに一日例のく橋溪小釣して在るる
 ちの自を身保するもそまづ釣は止るるの産に
 伴ひ何ふよの耳らるるやと官で我軍はんれをけは小
 一友を許すはるる子牙をさるるをさるるやと母をさるる

いふを原らばきし城壁に海城の御公より子
 熟くと武を相を認て大に怒られたけの相をばしと
 武をいふる凶事をうらやあしとあされしとあさ子
 のいふる他人を傷らわしむるに必し他人に傷ら
 黒氣天庭城隙くそ北明白現うと武を許て是
 死すとも情に定ど志し家に老る母をて他に養ふ
 そのかゝいふる御さうを為るに是を答ふんや子
 笑て死生と福禍と天に係り人の力を以て遷
 改むるはむべし御母を事の変に遇ふ毎日々
 又我の幸深て是を救ふ武を許しとせしむる人の

らち源一葉しその思ふ辨りて城を母怪し定とも母
 幸分ちんと城を他の故を以てして相の正城を
 打る色らるがある日採推して城中に武をうらに門吏を
 んといふを告ぐいと西伯の仁政城の城をむしむる
 出入を捕ふるおとそあさし商人の税収人といふ
 せしめ我の罪を責めてせしめふ武保保し此をのける
 せしめいふるに宿るを怒りて城を食るや門吏怒て武
 をおんと武をせむるを武を許て防るを強て門吏を
 間中一擲に撃殺しと城中で武ををせしむる
 武をを御し西伯に具し西伯に明し武をを

岐州の守
七小島
畫紀
木成
刻て
宰吏
と
呂



三國大書傳卷之三十一

三國大書傳卷之三十一

六

書本合刻

書本合刻

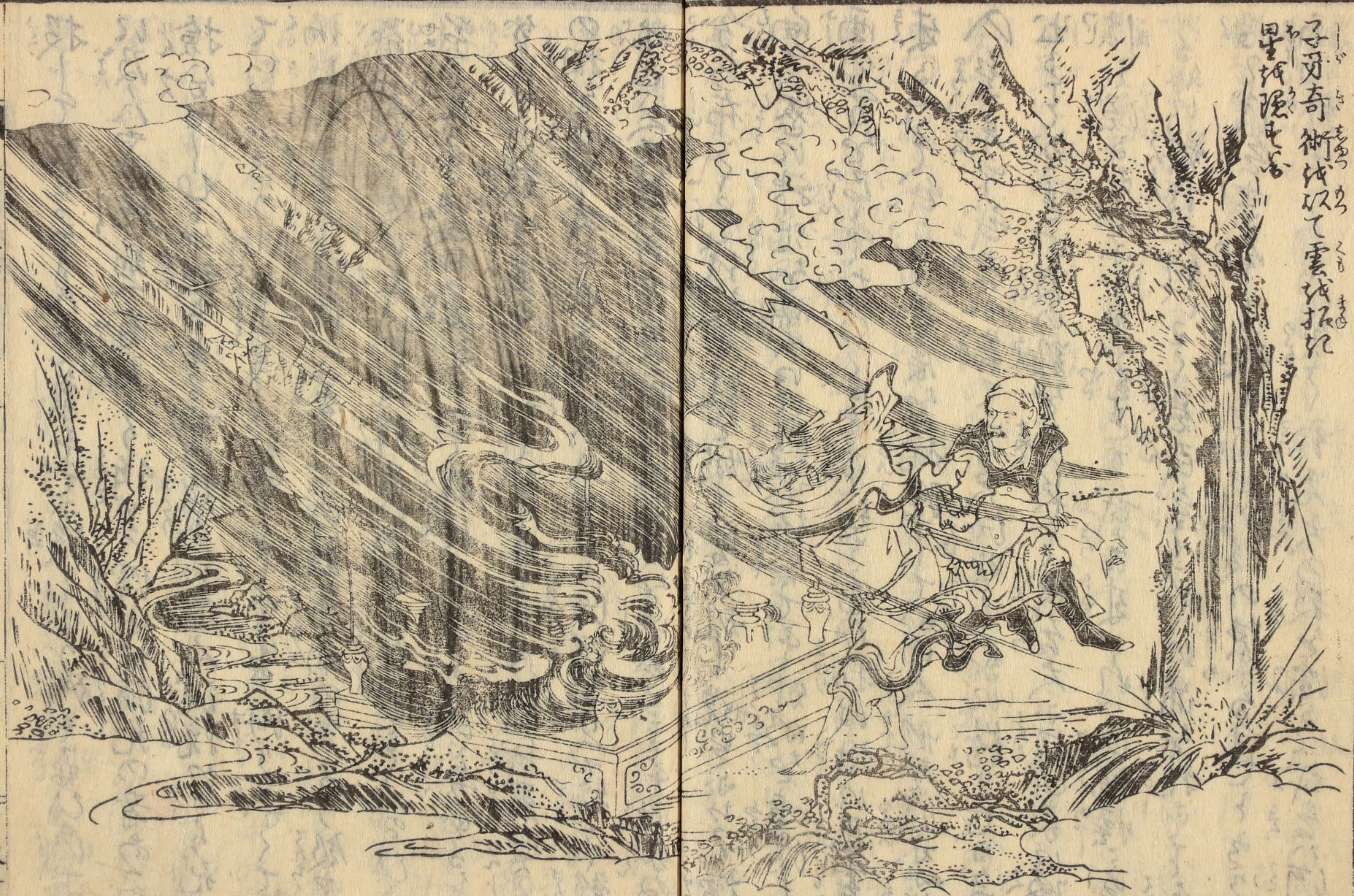
城新ふ西伯のいふくわくを宮のいまごいふくわくを
 汝免し得ずるも人の一念にけりあふは
 死罪を宮先二年囚を辱しと七年に一人あつたは
 清の士にさしに牢に到るにその門鎖をく監司を
 殺す所をぬく刻り人形あり武を懐てそ故を宮
 を清士ころして西伯の徳政課練堅獄を用ひ頑
 なる民の教に遵ぶるものあはば七日晝て牢と一木を
 刻り吏とい衆人をも徳義に慕て脱去し城を
 と武を君の仁恵に死すも怨る不ちう後
 を人老母ありて昔ふそのれし三年のるいんをん

と流を流して款支悲むるを清士憐みて汝母ありて
 父母をさる人我汝がぬおひんそそ名取ひるは
 西伯の我に存をりて民を流るに人の子城囚を
 そ母を殺すべらんやそ殺すび武をさる出しは汝の
 母を母汝喜ぶるの計はも多又母て獄に
 十日の内に母を兵士城流るに擄捕て死刑に
 べしと汝を武を相謝して家小返る時にそ母武を
 今日の時未とて流沈積るぬふゆり母を城懐て汝を
 して殺れまると汝はさるや武を為物の仁徳をそつて母
 に新ら母は汝をむびつて云らふ上の慈悲かくのどん

母を産み人母のいそく我織紡の業をわたりても年月を以ては
 べらまは汝をに、おろそかぶらび早々所産しとあきごと武吉
 是に従ぎして子牙の許に至りて流せしとそ日確漢の行く
 子牙に對面し我保む先其業を求むるに子牙のいそく我
 先ふもいづるごとく人間の死生は定まる天の數あり人の力を
 めつて救ふべしとびとしか我母の教を蒙りてけまに身を安
 せ我け直ふ救むんが者ぶらびこれ一ツの術ゆりてそ石室の
 中にきて一蓮の擡城すまへ武吉が年城尋の丈に意下と
 身を束て人形を造り中に至り早二十八日をそその位に

ちち布く是城記を焼く髮を乱し洗足おちり擡ふ
 向て窓に神呪を唱へに清水城合てそ焼ぬを噴消し
 西の方を尋ぐ丸の身を奉りまゝあひ招は併に思雲記
 来るやそ武吉が甲辰を掩隠してかの人形を渭水に投
 へ糸早く武吉お若て云らふは暗く家にお籠り七日がる
 出るとかきけ夜の難を免れと武吉大お怒り家に返り
 懐く返るまで十日おもむ武吉来るされ西伯懐くあひ
 りるぬに群はこれしとく是武吉のくは罪を犯すとそ
 懼るべしお命に投て首を刎後の棟おるはとちりふ
 西伯卦をまよひて空くお先天の數を演るに武吉は河に

子牙奇術伐以雲城招紀
早城隱也



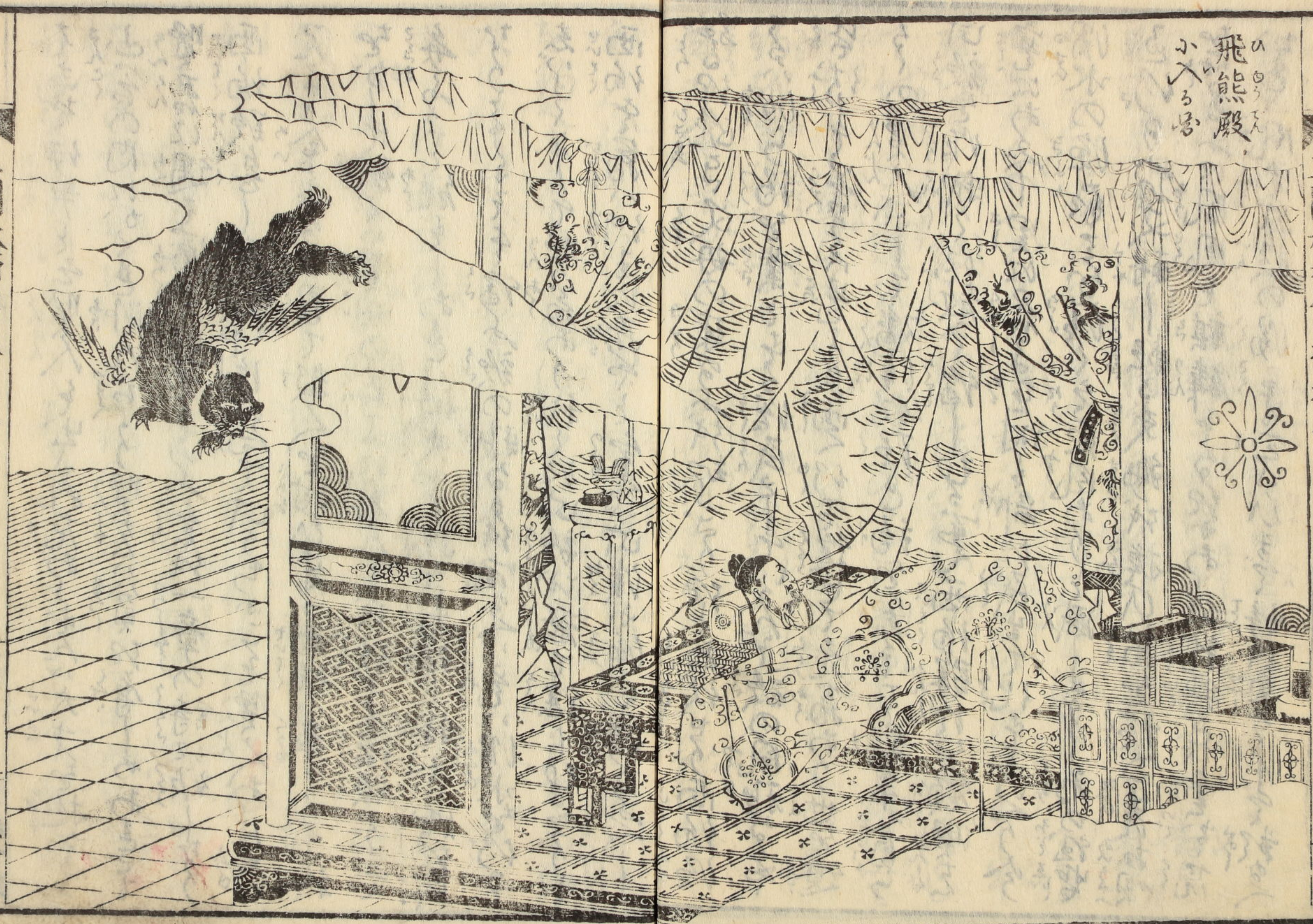
投じて死せるらんを象までおぼしめし何ぞ其ひあはれ
 に及んやとゆふ如く有司より所々渭水に流死の者あるを
 檢分せしむる如放ちせる所の樵吏の衆人乱抗にり死
 てつらつらるるよ一云上せしむおしとて事海らうかくて死
 伯岐州小をて武夜の爰お一つの熊東南の方より殿中の
 花入すの例に立しは城群にちのく物仗まとい人のひく
 爰爰らうの如き日爰をりて群に官のよに皆あむるもの
 かりしに散宜生をてて加しとかりは是れ我君賢人
 の相を得るよべら如く西伯のるるこく汝河をりて知らぬ教宣
 生こして熊のめやら良獸なるに如きをばせむとて賢知ぬし

伊丹の例に侍りて百官おし伏さるは是法にの上にて
 君のたにに相するとのえ東南より花入る賢人まにその
 子よりおべし君東南に獵して賢者城求めめ半し西伯
 仰らる爰森のし何ぞ汝く汝にまにるんや教宣生か云
 着般の言宗の天神より良弼城のやと爰入てを賢人
 の次女城畫しめ善く天下に求めて果して傳説を得るひ
 是城た右に相るむしめ天下より治り湯玉の社稷中比衰
 一城再興しより君何ぞ爰を悟んて賢人を棄るよ
 屋らんや西伯官く汝がトトむとて大にまひのひそ云
 ふ志つて女く軍兵城傳し九龍の車城しし教十の

武官城從く御駕を洛陽の漢の邊に追せしむら
 西伯子丹の孫を訪弄子丹は天子の政を軍師に相と
 斯て西伯今日の猶ハ猪麻の類は成りておわは王者の相
 とりて賢人成末のふらまは唯一の船に漢につおをを
 取に二人ありあるは漢一釣一盤石の上の何れ一竿
 成りて成敵ておれおれおれおれおれおれおれおれおれ
 て討玉の道成識る辞多し辛甲といふ將成て
 何をぞと尋らるに我くはいあるに何れ成りそのあ
 釣成意漁を業としてある成事不將軍ハ河をさうら
 來のあ辛甲といふ西伯猶ハあふくといふ成て皆く

強に成り又母の事成りてさう成りお仗り西伯は
 るハ母ら釣を業とする俗民としていんが歌の風雅を
 皆成してさう成りて西伯は遂に老翁あり世を遺
 るの賢人かして儒漢に類し釣を業として教年之自ら
 け歌を作我くに教へて後一むる西伯群を顧賢志
 竟にあふ一里に君子を討ふ部た民を化せしり今
 渭水の漁家も清くさる風ありと感しるる乃の程也
 是のまよひ又耕一耘る文細成撫の笛を横へて生れお
 をさるまの周風を麒麟をさるあわ成新樂也雲かた
 いもバ風中バ鼓の湯もさるひまが辞成身くしを成る

飛熊殿
小入る



三國妖婦傳卷之二

三國妖婦傳卷之二

書本

書本

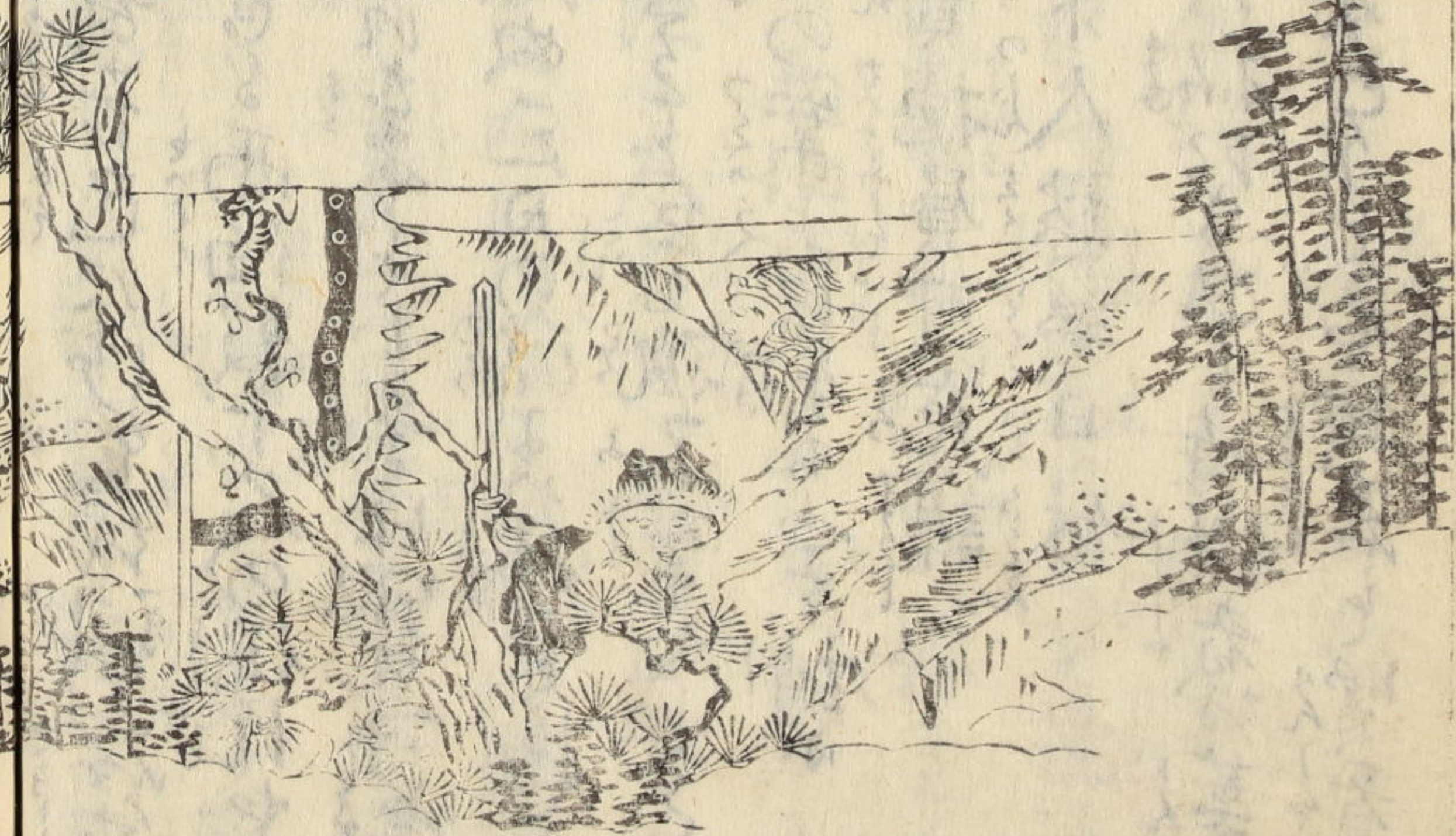
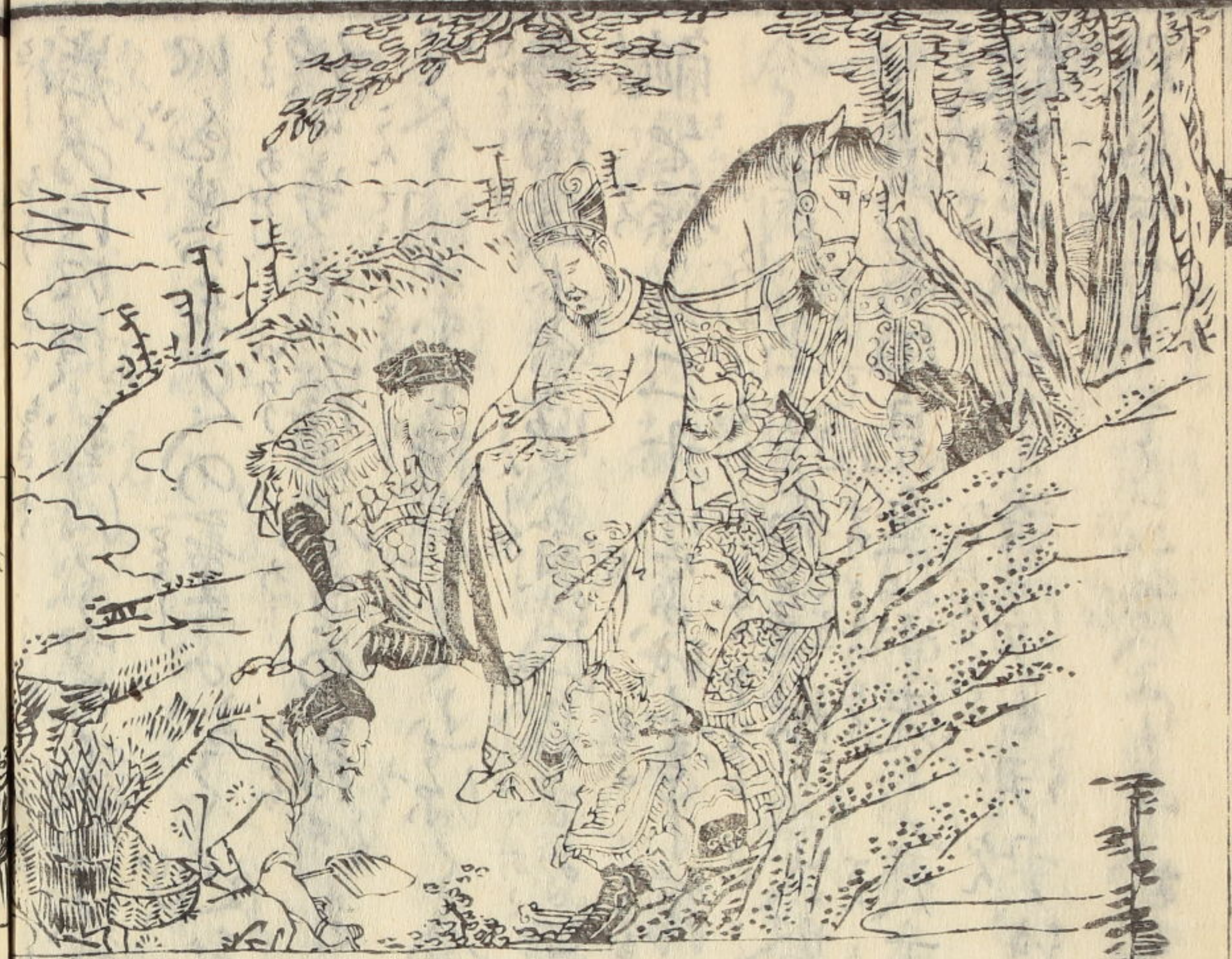
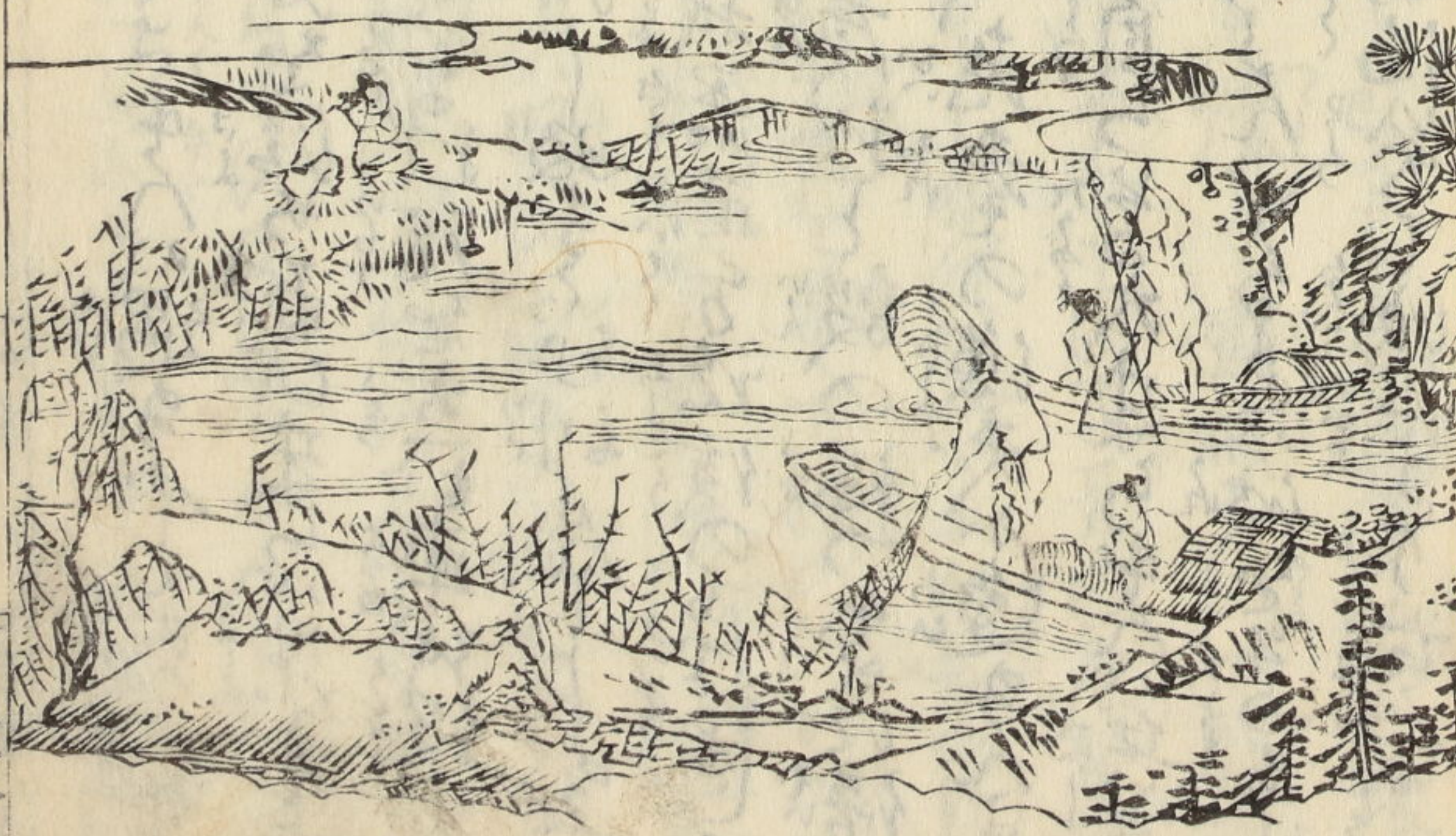
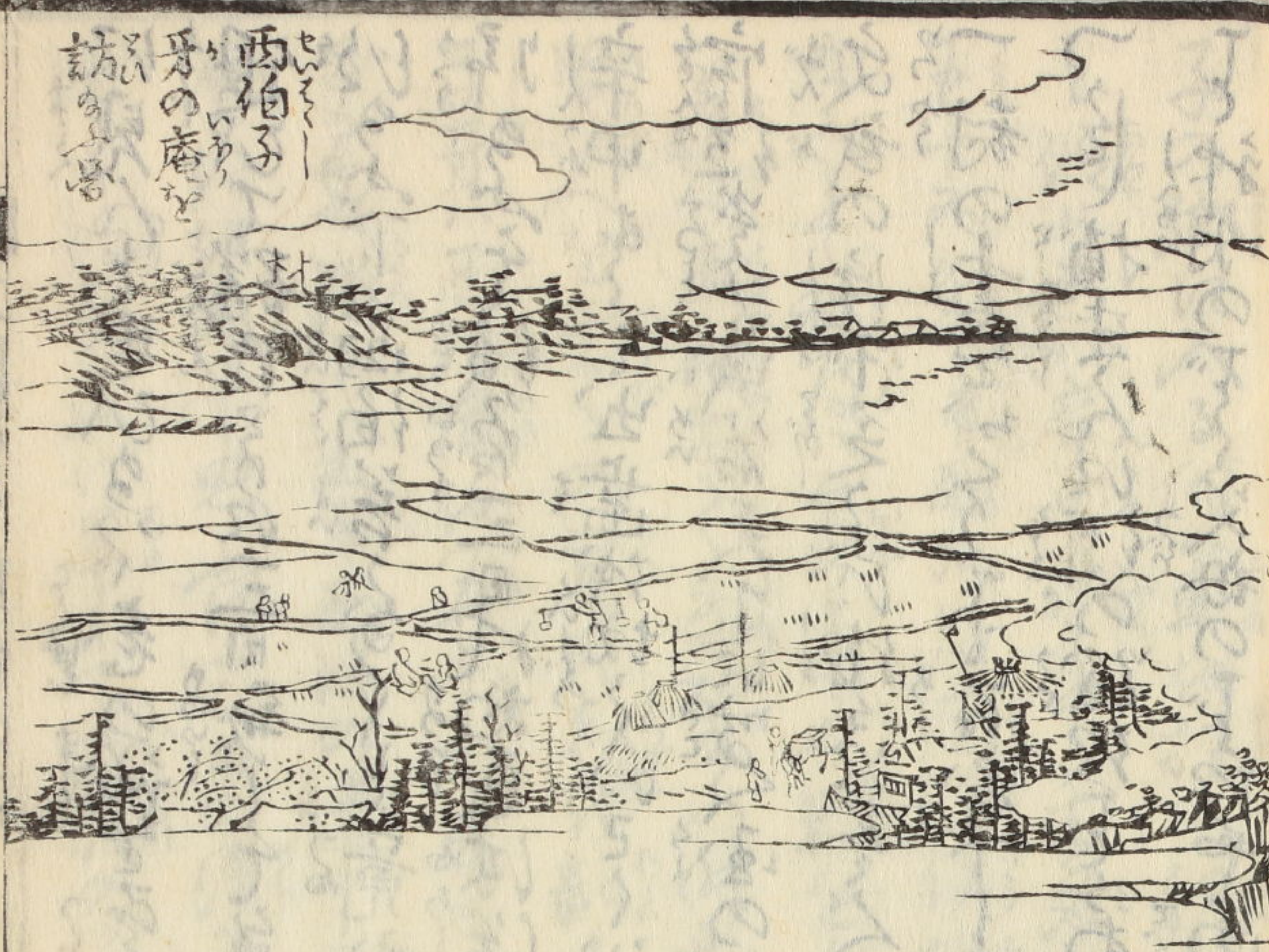
だまき伊尹と云賢人を出したるわんが大夫を抱かざり
 山谷の内にかくも脚んたう賢人の負に辱しめあまざり
 賢君に遇を富むにむすといふ言は一章の詩に依り
 西伯歎息しむ群臣に向てけうちかこそ賢人あらん
 見えと命トのふ置て敷人をばひまる西伯ハ車より下
 ちかして飲く賢明の君子に貝んと我歎も倍服して
 毎ふて能むとあまは彼夫も我を物たり我ハ情を
 たりと事ふぞを憐み歎の射る成官もこれハ渭水を以て
 志づくよして賢翁あり我にけ歎我敷て憐むむむらりと
 西伯を翁ハ何玉に吾やと室ハけ漢水流く行むるべし

そん人釣るに釣城曲を設て魚城釣おわび玉
 を釣るときて毎に磻溪の岸のい小をしすふぞ西伯
 大に悦び又車に坐りて流被下にして足あふれ老翁と
 わりざりハ車城停く立懸いあふれに磻石堂の後ハ人
 の想ま出まり又りの柯を折刻をうふて心をわすれ
 古今の魚に逸ぞと磻溪に隠る賢者ある世の人
 知らざるも一ハ人君子あふ漢の傍の磯を以て釣し
 なると云釣く西伯をば人あふれに碁因き一武者をば
 た石の武士を城く西伯の車の前ふふ時西伯言く
 我ゆむらつて河に流く死せりと此かんぞ上城傷刑を逃し

一やと武を首を地ふつもあつてよを蔵加せしにあつて
 辺にを人の漁獲あり岩陰陽の理か道下兵法の要法
 を究むは人しと推演の交あるらつてけるに災を掩ひ
 今日に到る余武をめく老母武書いんがぬく縁を
 は瀛の罪武教一ありと屯るふど西伯移たて老龍河
 小のりや言て礪溪の派室に現る大君も是も貝人
 とるハ道志をけんと申るも矢に収びあひ前の罪武
 免し先にをせし礪溪にむあふ子母ハ三日以前西の方岐
 州の室にあつて一道の祥雲起くそ末渭水かせまる武
 作がんで老賢君来り官人瑞ある武を徳と礪溪斗

岸の江に推を流くや流てあす武を己に涉駕武しを室
 にを也バを人の童子あつて運むる西伯教十人の従は
 終小歩く宿小入るの宿河也にをやと小亭に官の六
 て今胡来を撰んとて山深く入ぬ三日の後ハ陽月と
 西伯教トく賢者武官もあつて是孤不幸とく
 觚を操く二十八字武書一箱の案上にをあふを詩小
 辛訓山河布遠猷
 大賢抱負可充謀
 此来不見垂竿老
 天下人愁幾日休
 教直生がいとく音湯王伊尹武招たあひ一時使者武華
 野に向らうとて二度よしてあすもるとるや我君と賢者

西伯子
牙の庵
訪



三國女嬀傳卷之二

廿五

書

に見んと思ひのづき老の誠をさそびんが遇めあしとて暫く
 退いて群にその二日致して身を清め再び来らば見るとは
 此のふべし西伯若くはくと竟かされ唐をさすも車は役して
 帰るを後者二月れ物忌は治しぬきむむりんとしあふ
 辛甲もさし出齒城切くいと我君西を法侯の忠信にて
 官にさく威若天下にさく玉の度ほど殷の保つまに信し
 文武の信下さすべゆらにまゝ人老老の漁夫も違ふんよ
 一封の書をちくりてもるあづし自らも大自らもん兵士は
 つし捕まんに河の難はとあらんいなるさば破をさるるよ
 と神明のぞく父母のどけや西伯笑て油誤さりたんと君

子の郷に入る時車は担て終るると是賢城致子の及
 とはりさバ辛甲仕してそ身を後ぐ齋戒を起て殷の討
 五十二年辛酉九月西伯侯那昌あさび子牙の唐をさ
 めんとそ世有ハ多々の人数をさすもさづふ文武の信下
 を従へ車に乗くさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 賢人を當るの篤た志は章一先強せめて渭水の邊にお
 子牙ハ西伯獵城をさすそそそそそそそそそそそそそそ
 さるるも居く出で西伯の遺しをさすひ一向城をそそそ
 厚た城威し思ふれ三日の後らるるび又暮りまんと礪溪か
 出く釣さるる知に果して一族の人馬はうり母る子牙けとた

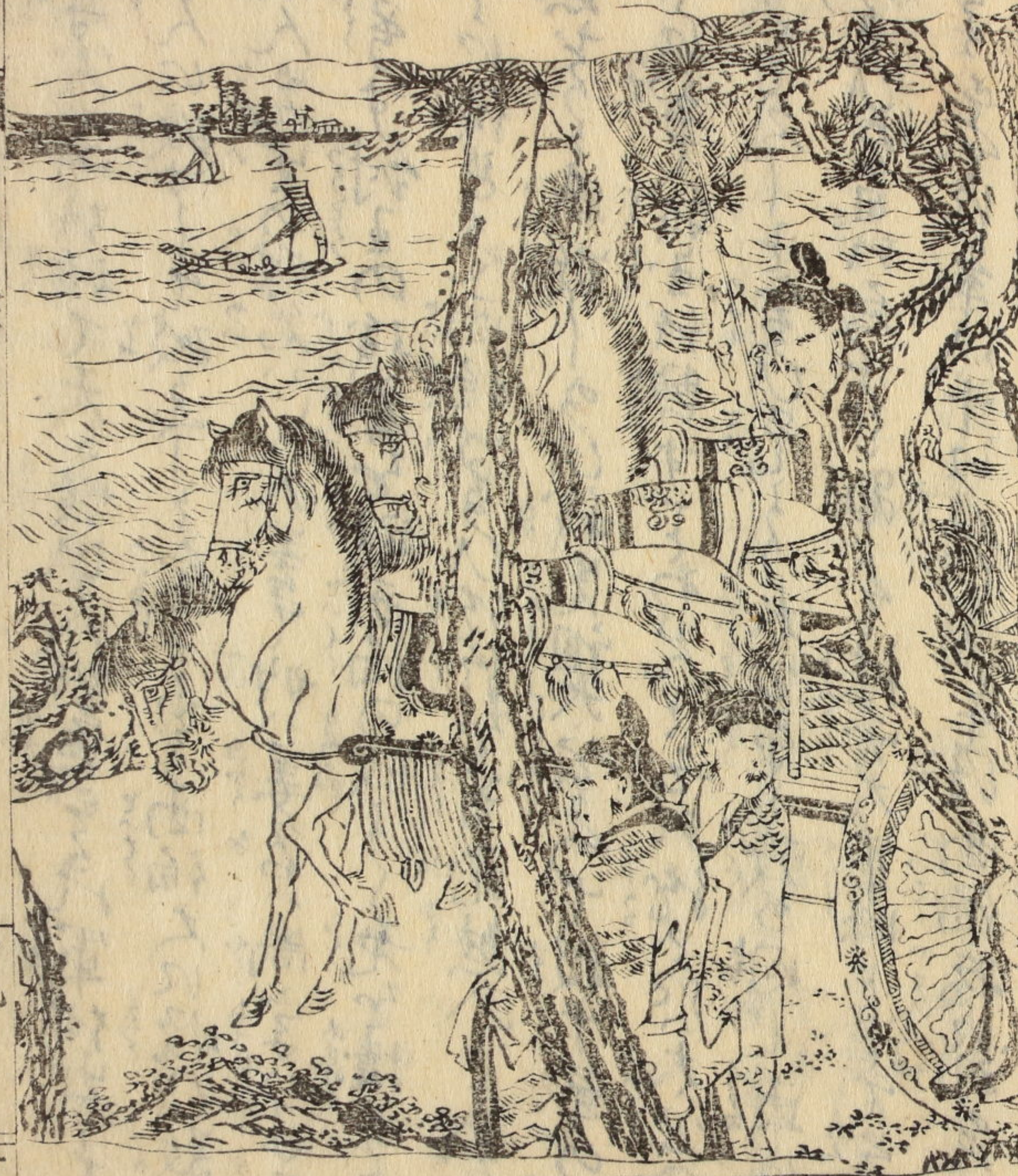
三國志傳卷之二
 二二
 書林合

磐石の上の岸一竿城を造り初めて西伯の伊賀征伐に
 赴きやうと車をうり下を渡り歩く漢の道にをりて人城
 見ゆふに都の臺の下に城を築き其の城の毛城頂
 小似たりと顔はるげまをりて城をふんとしるども半
 城を造り更に顔はるげまをりて城をふんとしるども半
 城を造り更に顔はるげまをりて城をふんとしるども半

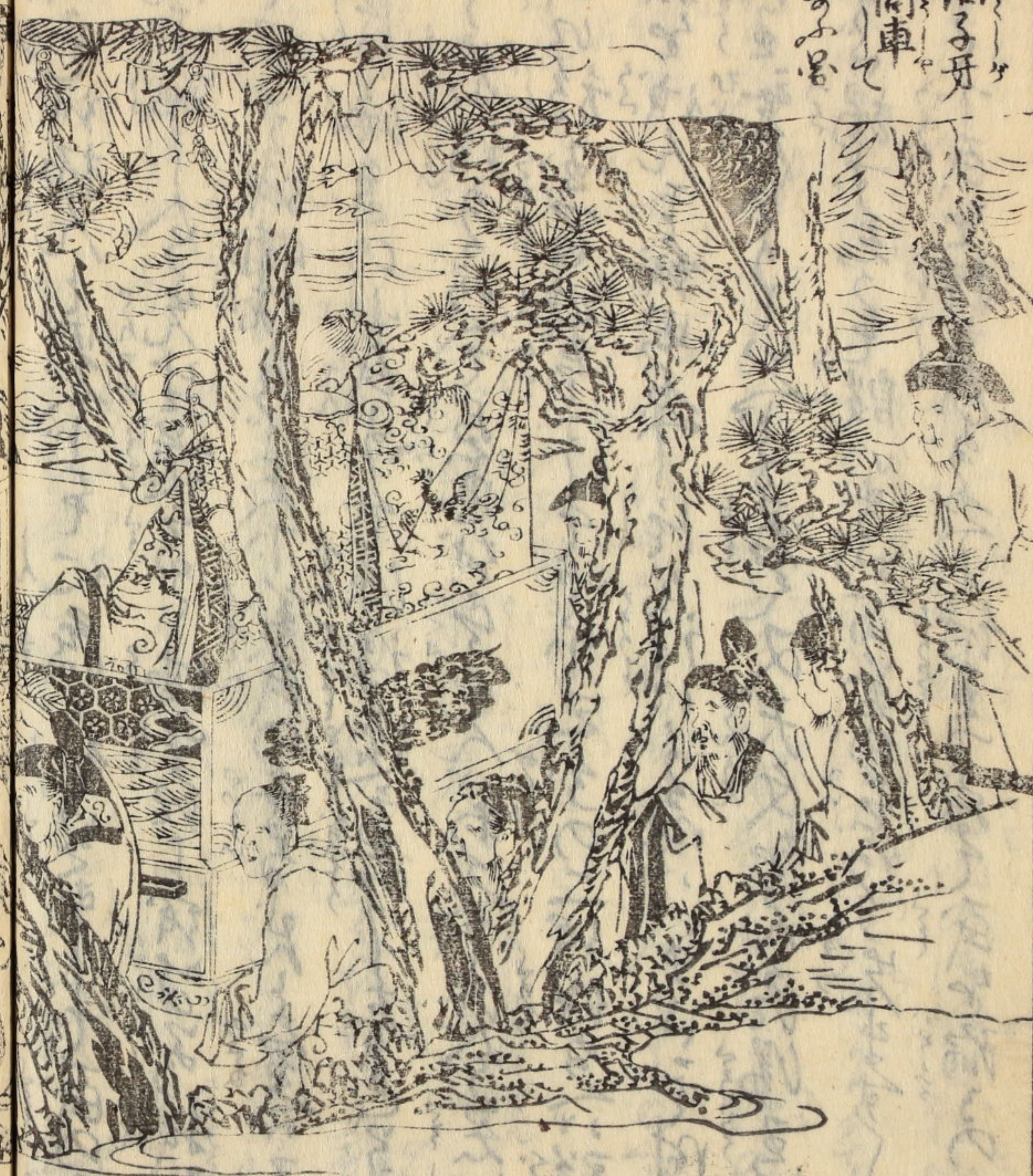
西風起り白雲飛 歳已暮兮將焉為

西伯恭々として石に例に立てて城を築き其の城の毛城頂
 小一齊に物しるども子牙を悟教上の城を築き其の城の毛城頂
 て西伯城扶起し城を築き其の城の毛城頂
 伯姬昌々今討王政城を築き其の城の毛城頂

我は城極んと思ふどもに爲く智を以てて民の心を副
 んと郷に今先生道をも徳を以てて城を築き其の城の毛城頂
 我は城極んと思ふどもに爲く智を以てて民の心を副
 んと郷に今先生道をも徳を以てて城を築き其の城の毛城頂



西伯子牙
を同車
歸る小思



改すんべつ時侍て天小順ひ人の意ぞ此軍伐出でて殷了
 向ん改すく破る平と宣るも西伯大に悦び教で教を
 承ん先生の姓若いん善く姓ハ善名尚字ハ子牙飛熊
 と号す討玉の残害を避西伯の改く老を憐あめとて
 くに徙むる之西伯は多ひ悦びを省飛熊入ると愛うこれ
 意ぞりと感歎し多ひ我先祖大公うて数十年の後賢人
 これぞ我玉伐興すトわんと云れ猶多し大公の子を
 めんとく一と宣ひ是より大公を改め同ハ車に呼ぶ
 多しを同はる多しを同はる大軍師としてするひのみ
 りふきでい年八十に及びるる平後西伯病に死すひ危らん

とすよりく世子姬全と多しを同はるのト伐托のひ世子を
 大を平に流ふるも我かつあるとせよと宣ひてつねふ
 藁ドのふ流る年九十七後に諱く周の文王と申はる
 あり



後中三國志女作卷之二終

